

民間塾②（1/2）

～江戸にも名を知られた数学者 宗田運平～

唐津市見借の庚申社（こうしんしゃ）に下る道沿いに、大きな石碑が建っています。石碑には「先覚（人より先に学問をして導いた人）宗田（そうた）運平（うんぺい）先生」と刻まれています。宗田運平とはどんな人だったのでしょうか。

運平は、天明7年（1787）黒川村（今の伊万里市黒川町）の庄屋宗田信左衛門の長男として生まれました。宗田家は代々見借村の庄屋を受け継いでいましたが、当時は祖父の清右衛門が見借村の庄屋をしていたので、運平の父信左衛門は黒川村の庄屋を命ぜられていました。

当時の庄屋の子供たちは、自由に私塾で学べるという環境に恵まれていましたので、運平は11歳で横竹村（今の唐津市鎮西町横竹）の庄屋富田楽山の由（ゆう）義（ぎ）斎（さい）で学び、14歳になると、柏崎（今の唐津市柏崎）の蒔（おん）徳（とく）軒（けん）で塾師として名高い稲葉伊蒿（いなばいこう）の教えを受けました。

運平は17歳になった時、祖父の後を継いで見借村の庄屋を務めることとなります。若くして庄屋になった運平は、庄屋としての忙しい仕事を務めながら農業に励み、夜は書物を読み勉強を続けました。

文化9年（1812）、運平が25歳の夏、彼の人生に大きな影響を与えるできごとがありました。

それは、伊能（いのう）忠（ただ）敬（たか）が幕府測量隊を率いて唐津東松浦地方の測量にやって来たことです。伊能忠敬は、みなさんもよくご存知のように、17歳で伊能家へ養子に入り、傾きかけていた家業の酒造業を立て直すと、49歳で家業は子供達にまかせ、自分は江戸に出て19歳も年下の幕府天文方高橋作左衛門について和算（日本に古くからある数学）・天文学・暦学（太陽や月の規則正しい動きから暦をつくる技術を学ぶ学問）などを学びます。やがて、その知識を生かして日本全国の測量を行い、大日本地図を完成します。

伊能忠敬の率いる幕府測量隊が、唐津東松浦地方を測量して廻ったのは、彼が67歳の時です。『伊能忠敬測量日記』によれば、唐津東松浦地方には文化9年8月17日から9月16日まで約1箇月滞在し測量を行っています。この時唐津藩は、測量隊一行の道案内、測量器具の運搬、宿泊の準備から食事の世話まで、すべて村の庄屋達に任せました。この時25歳であった見借村庄屋宗田運平は、測量隊の手伝いをしながら、67歳とは思えない力強さで測量隊の先頭に立ち測量をして歩く伊能忠敬の姿を目のあたりに見て、自分もいつかはこのような人になろうと思ったに違いありません。それから3年後、運平は和算を学び、やがて天文学や暦学にも興味を示すようになり、彼の学問に対する熱心さは藩内に知れわたるようになりました。

天保7年（1836）、50歳になった運平は、見借村に私塾「愛日亭」を開きます。ここで彼は、儒学（中国の古い学問）だけでなく天文学や和算（数学）も教えています。「愛日亭」には、村の若者ばかりでなく唐津藩士が運平の教えを受けに通ってきました。明治の初期に、唐津の教育界で数学の大家として多くの人材を育てた小田周助もその一人でした。

～2/2へつづく～

分野 歴史

地域 唐津

◎地図・写真・統計資料など



宗田運平記念碑
唐津市見借

（『郷土につくした人々』より）

◎引用・参考文献（出典）

◆『郷土につくした人々』
～ふるさと唐津の偉人たち～

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html

民間塾② (2/2)

～江戸にも名を知られた数学者 宗田運平～

～1/2からつづく～

弘化元年(1844)、運平は江戸に上り、当代一流の数学者長谷川善左衛門弘(ひろむ)の門をたたきます。この時運平は58歳、師の長谷川善左衛門は、23歳年下の35歳でした。年老いたからだで300里の道を歩き、江戸まで勉強に行こうとする熱意にはただ驚くばかりです。

やがて運平は、めきめきと頭角を現し、長谷川門下の高弟のひとりとして知られるようになります。運平は恩師の長谷川先生に、このまま江戸にとどまるよう強くすすめられますが、それを断り帰郷して「愛日亭」で儒学や数学の講義を続けて行きます。

安政5年(1858)、唐津地方の上空にほうき星(すい星)があらわれました。当時、ほうき星があらわれると不吉なことが起こるといわれていましたので、村人は恐怖にかられましたが、運平は「愛日亭」で西洋の天文学の知識を紹介し、ほうき星はけっして不吉なものでないことを知らせ、村人を安心させました。

安政5年から3年間、唐津藩政を任された小笠原長行(ながみち)は、江戸から帰ると再三見借村の運平宅を訪ねています。運平は「和算はどの様にして勉強しているか」とか、「今どんな本を読んでいるか」とか、「まだまだ長生きして学問に精進するように」と励まされ感激したと、その時の様子を記しています。その後、幕府の老中として活躍する長行は江戸住まいが長く、運平の江戸勉学中の評判を聞いていたのでしょう。数日後、お城より筆立、すすり箱と一緒に、新訂坤(しんていこん)輿(よ)略(りやく)全図(ぜんず)(世界略地図)が運平の元に送られて来ました。

晩年の運平は、子供たちに次々に先立たれ不遇でしたが、明治3年(1870)、84歳の高齢でなくなるまで、学問への情熱は生涯かわらずに持ち続けました。

◎エピソード・伝承・うんちく など

儒教とは：五常(仁、義、礼、智、信)という徳性を拡充することにより五倫(父子、君臣、夫婦、長幼、朋友)関係を維持することを教える。儒教の考えには本来、男尊女卑という考えは存在していなかった。しかし、唐代以降、儒教に於ける男尊女卑の傾向がかなり強く見られるのも事実である。これは「夫に妻は身を以って尽くす義務がある」という思想(五倫関係の維持)を強調し続けた結果、と現在ではみなされており、儒教を男女同権思想と見るか男尊女卑思想と見るかの論争も度々行われるようになっている。

「仁」人を思いやること。孔子以前には、「おもねること」という意味では使われていた。[要出典]白川静『孔子伝』によれば、「狩衣姿も凜々しい若者のたのもしさをいう語」。「説文解字」は「親」に通じると述べている。

「論語」の中では、さまざまな説明がなされている。孔子は仁を最高の徳目としていた。

「義」利欲に囚われず、すべきことをすること。(語源的には宜に通じる)

「礼」仁を具体的な行動として、表したのも。もともとは宗教儀礼でのタブーや伝統的な習慣・制度を意味していた。のちに、人間の上下関係で守るべきことを意味するようになった。

「智」学問に励む

「信」言明をたがえないこと、真実を告げること、約束を守ること、誠実であること。

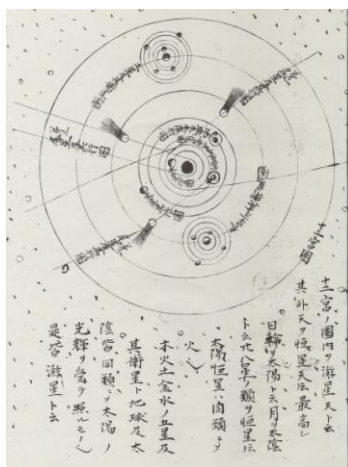
分野 歴史

地域 唐津

◎地図・写真・統計資料など



村人が画いた「ほうき星」の絵



宗田運平が天文を説明するために用いた図

(『郷土につくした人々』より)

◎引用・参考文献(出典)

◆『郷土につくした人々』
～ふるさと唐津の偉人たち～

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html